

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K21588

研究課題名(和文)社会をつくる芸術：「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

研究課題名(英文)An anthropological study of "socially engaged art"

研究代表者

登久希子(Nobori, Kukiko)

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・外来研究員

研究者番号：50772258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、欧米を中心に「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」や「ソーシャル・プラクティス」と呼ばれる参加型のアート実践の分析を通して、フィールドワークに基づいた人類学的な芸術研究の方法論を提示し、既存の「社会」と「芸術」概念の再検討を行なった。とくに制作プロセスにおける「参加」と「協働」という要素に焦点を当てることで、グローバル化が進んだ現代社会においてアートとアートに関わる人々が直面する葛藤のあり方が明らかになった。それは、資本主義社会におけるアートの位置づけの議論の深化に寄与する議論と位置づけられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「社会的な問題」にアプローチするアート実践を取り上げた本研究の意義は、フィールドワークに基づいた人類学的な研究の方法論を提示した点と、それらの実践における「参加」や「協働」といった要素に焦点を当て、既存の「社会」や「芸術」の概念の再検討を行なった点にある。個別の事例を通して、民主的な手法としての「参加」や「協働」において何が目指され、実現されているのかを明らかにすることで、本研究は現代社会における商品/ギフトとしてのアートのあり方を贈与論の視点から分析した。それは「社会」と「芸術」という概念・実践の再考にもつながるだろう。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes such art practices as socially engaged art and social practice that approach to various social issues. Based on the fieldwork of different projects held in Japan, Poland and the US, it proposes an anthropological methodology to analyze social art practice. Focusing on how collaborations and participations are realized in those practices, it points out that those elements are not only making art projects more democratic, but also make collaborators and participants to experience the process of making art, which has not ever been that explicit in conventional art objects. They understand how person and things interact and merge through the process. Such collaborative and participatory practices contributes to emphasize the gift aspect of art.

研究分野：文化人類学

キーワード：アート 現代美術 参加 協働 贈与論 制作プロセス 美術批評

1. 研究開始当初の背景

貧困や紛争、気候変動、移民、過疎化など、その地域や時代における何らかの「社会的な問題」に関わる実践は、これまでの美術表現においてもさまざまなかたちで試みられてきた。近年「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」や「ソーシャルプラクティス」と呼ばれるようになったそれらの試みは、「社会的な問題」の表象というよりも、むしろ何らかの現実的な変化や解決策の獲得を目指してきた。欧米では「ソーシャルプラクティス」のコースや学位が各地で誕生するなど、ひとつのカテゴリーとして定着してきたと言える。¹

美術史や美術批評の文脈では、そのような実践の例としてトルコ出身のアフメット・オグットを中心に 2012 年から始められた「サイレント・ユニバーシティ」(母国で専門職に就いていたものの単純労働を強いられる不法移民たちが、それぞれのもつ知識や技術を教える場として構想された)や、オランダ出身の医師でありアーティストのレベッカ・ゴンペルツらによる「ウイメン・オン・ウェイヴ」(非合法で危険を伴う妊娠中絶手術に反対し、医療機器を備えたオランダ船籍の船を国内法が適用されない国際水域に停泊させ、安全な施術の提供と啓発活動を 2001 年より行なっている)などがしばしば挙げられる。さらに、コミュニティに密着した草の根的な試みから、美術館が関係するプロジェクトまで「社会的な」アート実践は各地で無数に展開している。さまざまなアクターが関与し協働するプロセスを重視し、近代西洋的な従来の意味での「芸術」からは乖離していくようにすらみえるそれらの領域横断的なアート実践は、「ひとりの作家」による「完成した作品」を前提とする既存の芸術の分析枠組みにおいては十分に論じることができない。その問題点は、ソーシャルプラクティス的な実践の「評価」の困難性ととも、美術史や美術批評の文脈でも度々指摘されてきた (Bishop 2006; Thompson 2012)。

2. 研究の目的

協働するプロセスを重視し、近代西洋的な意味での「芸術」とは異なって見える昨今の「社会的」なアート実践は、既存の美術の分析枠組みでは十分に論じることができない。そのようなアート実践を論じるために、本研究では (1) フィールドワークに基づいた人類学的な芸術研究の方法論を提示し、(2) それぞれのプロジェクトにおける「協働」のあり方を調査することで、(3) 既存の「社会」と「芸術」概念の再検討を行い、それらがいかなる関係性のもとに生成していくのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

既に完成した作品を対象とする従来の芸術研究に対して、制作のプロセスに着目する本研究では、日本とアメリカ、ポーランドにおけるプロジェクトに一参加者として加わり、実践のプロセスに携わりながら調査を行ってきた。あわせて関係者に個別でインタビューを実施することで、プロジェクトの遂行中に十分に質問できなかった点や感想、疑問、展望などを語ってもらった。それぞれの場所で取り上げたプロジェクトは、対象とする「問題」、手法、規模、参加者の属性も全く異なるものであるが、いずれも何らかの「社会的な問題」を取り上げ、その探

¹ 日本においては和訳されず英語のまま流通しているのが現状である。「社会性」に重点を置く欧米中心の現代美術の言説に対して、とくに日本では地方再生や観光産業、あるいは福祉に関わる「地域」との関係から類似の実践を批判的に論じる動きが目立つ。

究を共有している。例えばポーランドでは、現代美術センターで行われた「ソーシャルプラクティス」を対象に、展覧会の場を中心に大学生とアーティストが協働でワークショップ等をつくりあげていく現場の調査を行った。ポーランドの場合、アートに「社会的な」役割を求める若手作家の多くが「批評的美術」として知られる一世代上のアーティストたちの社会・政治批判的な芸術実践を参照にしつつ、それを越えようとする試みを行っている。しかし、そのような美術史的な理解は参加者にとってはあまり重要なものではなく、そこで「協働」すること、社会的に意義深いと思われる問題に取り組むことがまず優先される。しかしいかなる「協働」が良いのかは事前に決定されているわけではないし、アーティストやキュレーターが全てコントロールできるわけでもない。参加者個々人の希望やその時々の問題に都度対処しながら進められる「協働」は直線的には進まない。協働のあり方はその最中、そして事後に参加者やアーティストによってまず評価される。そこで行われる（自己）評価には「倫理的」か「美的」かといった従来の二項対立には回収されないさまざまな要素が関わってくるのが日本やアメリカで行った調査においても共通することが分かった。

研究期間の後半はコロナ禍の中における調査研究となった。本研究が対象としてきた協働かつ参加型のプロジェクトは中断や実施形態の変更を余儀なくされたため、オンラインを中心としたインタビュー調査と、オンラインで展開された参加型のプロジェクトの調査を行った。とくにニューヨークの図書館で始められた《憲法を書く》プロジェクトは、世界中のさまざまな地域の「コラボレーター」によってコロナ禍においてオンラインでたびたび開催された。フィールドワークの一環として自らが「コラボレーター」となり日本で実際に行ったワークショップについては『東京新聞』（2020年10月18日付）でも取り上げられ、多くの反響を得た。オンライン調査を通して、ワークショップの中でコロナ禍における「アート」や「社会」がどのように語られているのか、オンラインで協働することと実際の協働がいかにアーティストや参加者によって位置づけられているのかを考察した。

4. 研究成果

（1）アート実践における「参加」を贈与論から再考

ソーシャルプラクティスにおいて必須の「参加」という要素に焦点を当て、なぜそのような取り組みがなされているのか、そこでアーティストは何を実現しようとしているのかを、制作プロセスにおける人とのあり方とその変容、商品であり贈り物でもあるものとしてのアート作品という観点から分析し、論文にまとめた。（登久希子「アート作品の譲渡不可能性：参加型アートとその制作プロセス」『国立民族学博物館研究報告』45：262-296，2020.）

（2）ソーシャルプラクティスや参加型アートの制度的な側面についての考察

フィールドワークを通じた参加者／当事者の視点からの分析に加え、本研究では美術制度との関係におけるソーシャルプラクティスのあり方についても考察した。従来、美術市場においては取引が難しいと見なされてきた参加型でプロセス重視の作品について、それらがいかに経済的に成立しているのか（助成金、寄付等）どのように美術制度（市場、美術館、教育機関）と関係しているのかを、とくに欧米の状況を中心にまとめ、一部を論文や口頭発表の中で紹介した。（登久希子「アートの制度批判再考：オルタナティブ・スペース、社会的な実践」カルチュラルタイフーン2019、慶應義塾大学、2019年6月.）

（3）分科会を組織し領域横断的なアート実践について分析

現代美術の文脈における社会的なアート実践を含め、アートとアート以外（と見なされる）の分脈とのあいだで成立するような作品や実践が増えている昨今の状況をどのように人類学的に考察していくことができるのか。芸術と非芸術という二項対立的な視点を見直し、その境界的領

域で起こっている現象について比較・分析すべく、日本文化人類学会第52回全国大会において分科会を組織した。(代表者:登久希子、分科会「アートなるもの人類学:芸術と非芸術の境界的領域」、日本文化人類学会第52回全国大会、弘前大学、2018年6月2日)

(4) 特集論文を共同編集し、アート実践における「協働」を比較検討

先述の分科会とその後のディスカッションを通じて、異なる複数のアクターとの協働のあり方とその多様性を明らかにし、ポジティブな側面のみが取り上げられがちな「協働」のあり方について批判的に再考する必要性が明らかになった。ここでは社会的なアート実践におけるアーティストと参加者、ものの関係性を贈与論の視点から論じた。特集は人類学だけでなく、文化研究、社会学、博物館学、美術史や音楽など幅広い分野の研究者から反響があった。また申請者が共同で執筆した序論は、人類学におけるこれまでのアート研究の問題点と今後の展望をまとめた分析として評価を得た。(登久希子・兼松芽衣(編)「特集 協働/プロセスの人類学-同時代のアートをめぐる省察から」『国立民族学博物館研究報告』、45巻2号、237-260頁、2020年(査読有))

(5) オンライン上のシンポジウムの代替としての特集記事

最終年度に予定していたシンポジウムでは、研究者だけではなくソーシャルプラクティスの実践の現場における実務家、アーティストの方々も交えた議論を行う計画を立てていたが、コロナ禍により対面で行うことが難しくなった。そこで、オンラインジャーナルとして『コロナ禍と協働的なアートのゆくえ』と題した特集を組み、インタビュー記事や寄稿記事などを通して、さまざまなアクターが関わるアート実践の変化や現状を多角的に示した。本特集は、研究者のみならず、社会的なアート実践に関心のある一般の方や学生にもアクセスしやすいスタイルを心掛け、オンラインで一度限りで終了するシンポジウムではなく、本研究終了後も展開していく余地を備えていることで、より幅広く研究成果の一部を公表することができた。(登久希子(編)「コロナ禍と協働的なアートのゆくえ」(-oid、2022年3月))

[参考文献]

Bishop, Claire. 2006. "The social turn: collaboration and its discontents," *Artforum* (Feb): 178-183.

Thompson, Nato. (ed.) 2012. *Living as Form: Socially Engaged Art from 1991-2011*. MIT Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 登久希子	4. 巻 45
2. 論文標題 アート作品の譲渡不可能性：参加型アートとその制作プロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 261-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009612	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 登久希子・兼松芽衣	4. 巻 45
2. 論文標題 序・協働/プロセスの人類学ー同時代のアートをめぐる省察から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 237-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009613	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 リアル/オンラインにおける経験の違いを問うこと
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会第22回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 アートの制度批判再考：オルタナティブ・スペース、社会的な実践
3. 学会等名 カルチュラルタイフーン 2019（カルチュラルスタディーズ学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 現代美術の境界的領域
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 「参加型アート」の語り方
3. 学会等名 カルチュラルタイフーン
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 現代美術の実践におけるエージェンシーのあり方
3. 学会等名 日本文化人類学会全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 登久希子
2. 発表標題 アートマネジメントとフィールドワーク
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会第18回全国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

登久希子（編）「コロナ禍と協働的なアートのゆくえ」（2022年3月）
<https://journal-oid.org/special-issue/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------